

特別座談会

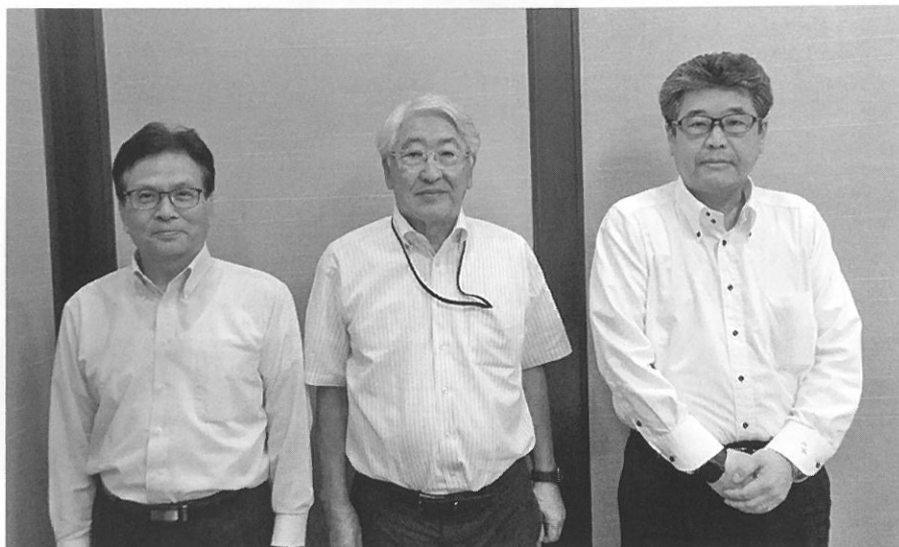
なぜ MIS が必要なのか？

— デジタル印刷時代の経営管理の中核として

デジタル印刷の普及により、小ロット・短納期・多品種対応が当たり前となり、オフセット印刷との併用による工程やコストの管理は一層複雑化している。こうした環境に対応するため、受注から製造、売掛・買掛、在庫や原価管理まで一元的に管理し、全体最適化できる MIS（経営管理情報システム）の重要性が高まっている。さらに、MIS と印刷機・加工機との連携により、自動化・生産性向上といった効果も期待されている。

特別座談会では、印刷会社向け MIS を代表する「プリントサピエンス」を効果的に運用している株式会社真興社（福田真太郎社長、東京都渋谷区）と奥村印刷株式会社（奥村文泰社長、東京都北区）、および MIS メーカーの株式会社 J SPIRITS（地代所伸治社長、東京都千代田区）を迎え、デジタル印刷時代における経営管理の中核としての MIS の活用方法と今後の可能性について意見を交わしてもらった。

出席者（敬称略）

（株）真興社 代表取締役 **福田 真太郎**奥村印刷（株） 取締役常務執行役員 **山田 秀生**（株）J SPIRITS 事業推進室室長 **岡谷 雄次**

MIS の価値は今後さらに高まっていくと確認する、左から岡谷氏、福田氏、山田氏

▶ 複雑で多様な印刷経営の一元管理

— 貴社の事業概要からお聞かせください。

山田 奥村印刷は1947年（昭和22年）8月に創業し、総合印刷会社として来年でちょうど80期を迎えます。

印刷工場は埼玉県川越市にあり、オフ輪4台と枚葉機5台を保有しています。すべて多色機です。本社は東京・王子で、プリプレス部門とデジタル印刷部門があります。オンデマンド機はカラー機6台、モノクロ機3台を導入し、名刺から製本まで幅広く対応しています。

私は長くプリプレスを担当し、2001年からはデジタル印刷を始めて、はや四半世紀が経ちます。

福田 真興社は1919年（大正8年）に創業以来、自然科学や医学・理工系などの頁物印刷を専門に続けてい

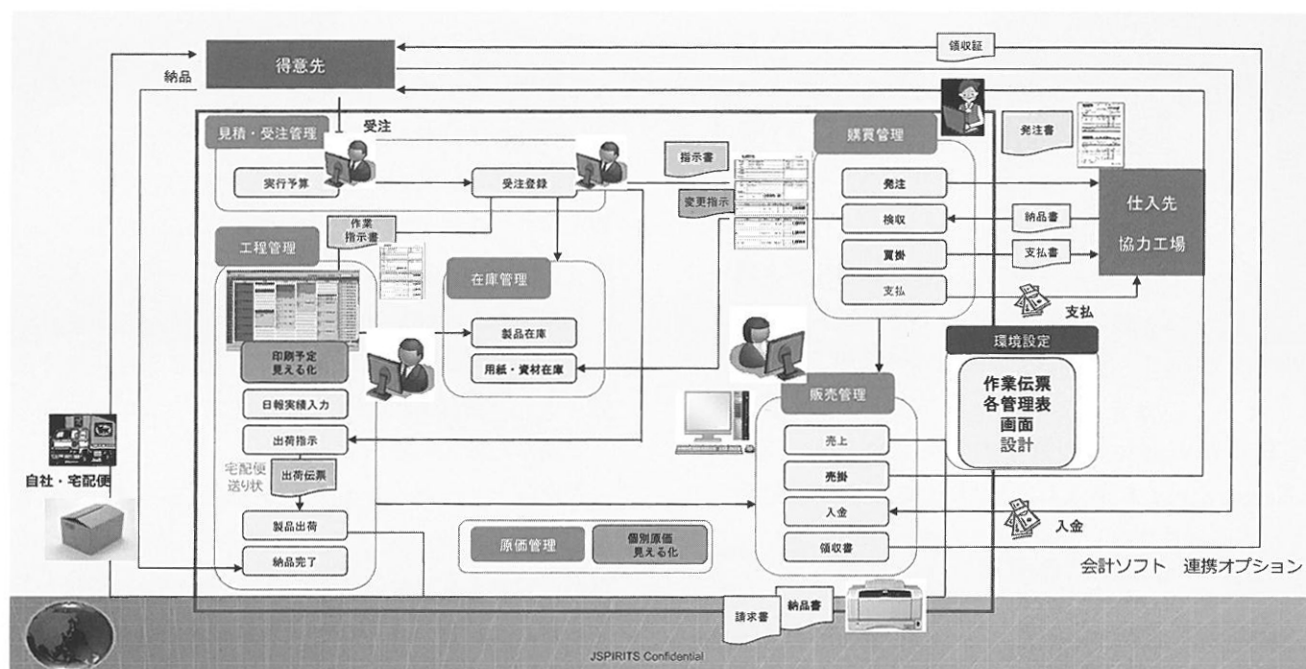


図1 J SPIRITSの「プリントサピエンス」は、見積・受注管理から工程管理、経営関係まで、印刷業務のすべてを見通すMIS

ます。

本社・工場は渋谷・代官山で、印刷機は8色機が1台、4色機が3台、オンデマンド機が5台あります。製本はオンデマンドでは対応していますが、基本は外注です。出版社の仕事がほとんどで、印刷までを主に担当しています。

岡谷 J SPIRITSは、今年で17期目を迎えました。現在、当社の事業の9割は「プリントサピエンス」の開発と販売です。印刷業界向けに、複雑な積算や見積もり、生産・原価管理、見える化までをカバーしています(図1)。全国で300社以上に導入いただき、北海道から沖縄まで広がっています。業界の統合やM&Aが進む中でも、新規の引合いが毎年増えています。

そのほか、自治体、官庁向けの自動印刷見積システム「ミツモザウルス」や紙卸商向けに特化したシステム「KamiSapiens」なども提供しています。

ーMIS導入のきっかけについて教えてください。

山田 MISへの取組みは2002年頃からです。当時、コニカミノルタのプリプレス生産管理支援システム「Neostream」を開発段階の時に知ったことがきっかけです。もともとプリプレスの進捗管理システムでしたが、その管理項目の細かい分類を見て、「原価計算に使える」と提案しました。そんなことから、急きょ原価計算ソフトとして開発が進みました。当時、私はみんなが帰った後に一人残って原価計算をしていましたが、その煩雑な業務から解放されました。結果的に「Neostream」は多くの印刷会社で導入が進みました。

当時の社内システムは、アクセスやファイルメーカーを使っていましたが、限界がありました。そこに日本印刷技術協会(JAGAT)でMISの勉強会が立ち上がり、MISとJDF連携の必要性を認識する中で、最終的にデバイスとの連携が強みのJ SPIRITSのプリントサピエンスにたどり着き、現在に至っています。

福田 当時、当社の隣にあった明和印刷に、その後に独立して(株)オーブを立ち上げた白井慶吾さんが在籍